

「ドーナツを穴だけ残して食べる方法」 一部の意見

まずは、例えば輪の形をしたドーナツ以外のドーナツで考えてみることにした。すると、あるアイデアが浮かんでくる。

それは、穴のあいていないドーナツの中央部分を切り抜き、その中央部分だけを残して、それ以外の部分を食べる。そうすると、中央部分だけが残る。これで、「穴が残る」ということになる。

ドーナツの穴を保存するという方法が考えられる。まず、なるべく薄くドーナツの穴の型を取るため、ドーナツをコーティングする。ドーナツの表面をコーティングした後、ドーナツ本体を取り除く。そうすることで、残るのはコーティングされた限りなく薄い皮の部分と穴である。これが最も、「穴を残す」に近い状態ではないか。

まず、「そもそも問題の「穴」とは何だ？どこの「穴」のことを言っている？」「穴を「残す」って何ぞや？」「どういう状態が、ドーナツが残っているといえるのか？」という疑問が浮かんだ。とりあえず、ドーナツの穴とは、真ん中にある部分を指すでしょう。まず、この穴をしっかりと理解するために、穴に指を通して(OK サインをつくるように)輪をつくる。その結果、指とドーナツは外すことができなくなった。つまり、この状態で、あなたが思うドーナツの穴を残して食べることが出来るかどうかである。この状態で食べてみる。穴に通した指には触れずにドーナツを食べることが出来た。つまり、ドーナツの穴を残した状態で食べることが出来たのである。

絵に描かれたドーナツの方がドーナツそのものではないか。なぜなら、絵を描くとき、モデルとなる現実のドーナツに似せて描こうとするし、現実のドーナツとは少し異なっても「いかにもドーナツである」ドーナツを描こうとする気持ちもある。…つまり、この問題におけるドーナツとは、食べれば無くなる現実のドーナツではなく、食べられないドーナツなのである。だから、ドーナツそのものが食べられないのであれば、ドーナツの穴ももちろん無くなることは無い。

ドーナツの中心部にある「穴」の半径と直径を計算し、ドーナツ本体との距離を正確に導き出す。その後、その「穴」を線で表す。そうすることで、数字だけをみると「穴」だけ残ることになる。

統計学的に見れば、ドーナツを 100 万回食べれば、1 回は穴だけ残っているかもしれない。

人生とは、ドーナツの穴のようなものかもしれない。もしもドーナツの穴がなかったら、ドーナツはもはやパンである。穴のないドーナツの上を歩いたとする。すると、端から端まで行けば、終わりを迎える。しかし、中央に穴があくことで、終わりのない円となり道となり、無限の可能性が広がるのである。人生と同じように、ドーナツには無限の可能性がある。

ドーナツの穴とは、もともと空(から)である。食べて消えたのはドーナツの穴が消えたのではなく、穴の周りを囲っていた壁が消えたのである。穴そのものは消えずに残っている。その穴のような目に見えないものを追い求めることが、人生そのものなのではないか。

ドーナツを食べ終わったとする。そこには穴どころかドーナツも無い。しかし、そこに残る匂いと味わいが記憶を呼び起こし、かつて食べたことのあるドーナツとドーナツの穴が、記憶としてよみがえる。つまり、視覚や嗅覚、聴覚を通じて、ドーナツが記憶の中に残り続けるのである。

『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』『in search of the lost doughnut hole 失われたドーナツの穴を求めて』(授業者により一部改編)

DIAMOND ONLINE「『ドーナツを穴だけ残して食べるには?』研究者たちが真剣に出した答え」(授業者により一部改編)

その他、SNS、本校教職員の声....